

連載コラム



第26回

きれいな虫たち(2)

～ トンボの仲間 ～



もとよし ふさお
本吉 總男

2016年9月

トンボ(広義)という名称はトンボの仲間全体の総称で、アオイトンボ、イトンボ、エゾトンボ、カワトンボ、サナエトンボ、トンボ(狭義)、ヤンマの仲間に分かれています。世界には数千種のトンボが生息していますが、日本には約200種がいるようです。また平成4年度末から5年間行われた守谷市(当時は守谷町)における自然調査では、34種のトンボ(広義)が記録されています(『もりやの自然誌』2000年 守谷町教育委員会発行)。

しかし残念ながら、みずき野周辺ではそれほど多くのトンボを目撃していません。ここでは、撮影できたものについて、写真と共に紹介します。

(1) シオカラトンボ

シオカラトンボはだれも知っているごく普通のトンボです。成熟した雄は胸や腹部が白いのが特徴です。雌の尾は黄色の地に黒い斑点が並んでおり、ムギワラトンボとも呼ばれています。



シオカラトンボの雄 7月下旬 第2調整池



シオカラトンボの雌(ムギワラトンボ)
8月中旬 第2調整池



未成熟のシオカラトンボのつがい
(上が雄) 5月上旬 第2調整池

羽化後飛び始めた未成熟の雄は雌と同様、外見はムギワラトンボです。この時期はどちらが雄でどちらが雌か区別がつきませんが、早くもつがいになっているものもあり、上が雄であることは間違いありません。未成熟というより、早熟という方が当たっているかもしれません。

多くの場合、成熟した雄の複眼は青く、雌の複眼は淡褐色または緑色です。雄の美しく青い複眼を見ると、「とんぼのめがね」という童謡を思い出します。

『とんぼのめがね』 額賀誠志 作詞・平井康三郎 作

曲



とんぼの めがねは
水いろ めがね
青いおそらを とんだから
とんだから



(以下略)

こんなにきれいな青い複眼のトンボはシオカラトンボ以外にいないように思います。

(2) コフキトンボ

コフキトンボはシオカラトンボによく似ていますが、シオカラトンボより小さく、胸の模様や複眼の色(茶色ないし褐色)により、区別できます。成熟した雄は腹部が白くなります。雌は2つの型があり、雄と同様、腹部が白くなるものと、ムギワラトンボのような腹部をもち、翅はねに赤い帯のあるものがあり、オビトンボとも呼ばれ、たいへん美しいトンボです。残念ながら、みずき野周辺ではオビトンボは見たことがありません。



コフキトンボ 6月中旬 本町地区

(3) コシアキトンボ

コシアキトンボはシオカラトンボより小さく、黒と白とがくっきり色分けされた美しいトンボです。腹部の一部が白く、腰があいているように見えるのでこの名があります。本町地区の水路上によく見られます。



コシアキトンボ 7月中旬 本町地区

(4) ナツアカネとアキアカネ

ナツアカネはアカトンボの一種で、秋に多く見かけるアキアカネに非常によく似ています。ナツアカネは6月頃から平地の水田や池で育ったヤゴから羽化し、夏も秋も平地で過ごします。一方、アキアカネはナツアカネ同様、6月頃平地で羽化し、山地に移動します。そして秋には再び平地に戻ってきます。したがって、平地で盛夏に見られるアカトンボの多くはナツアカネです。秋になると、平地ではナツアカネとアキアカネが混在します。

ナツアカネとアキアカネは胸の模様で識別できます。しかし写真を撮るとき胸が翅で隠れていたり、アングルがよくなかったりして、胸の模様をはっきり撮ることが意外に難しいのです。いくつか撮影したものから、分かりやすい写真を選んでみました。

胸部の3本の黒い筋のうち、中央の筋の先が尖らないものがナツアカネ、尖っているものがアキアカネです。



ナツアカネ 8月上旬 松前台大山公園 (右は胸部の特徴)



アキアカネ 10月中旬 本町地区 (右は胸部の特徴)

ナツアカネはみずき野周辺にもいるのですが、胸の模様を示す適当な写真がなかったため、松前台の大山公園で写した写真を載せます。この写真の個体は胸がきれいな水色ですが、胸の色は個体によって異なります。

(5) ノシメトンボ

ノシメトンボは翅^{はね}の先端が黒いアカトンボの一種で、夏から秋まで見られます。ナツアカネやアキアカネとともに、みずき野周辺に最も多いアカトンボです。



ノシメトンボ 8月上旬 どんぐり公園

(6) ウスバキトンボ

ウスバキトンボはとても不思議な習性をもつトンボです。寒さに弱く、九州以北では冬を越すことができないのです。ウスバキトンボは、どこからかははっきりわかりませんが、



ウスバキトンボ 9月上旬 貝塚地区

おそらく沖縄やそれより南方の地から毎年海を渡って、4月頃九州や四国にやってきます。そしてさらに北上し、5月頃には本州南部に姿を現します。その後、池や水田に産卵し、孵化したヤゴは短期間で成虫になり、さらに北上します。そして何回かの世代交代ののち、関西や関東では8月中頃、すなわち旧盆の頃にその姿が目立ち始めます。そのため「精霊トンボ」とも呼ばれています。さらに繁殖した成虫は北上を続け、北海道やカムチャッカ半島までにも飛んで行きます。

しかし、寒さには弱く、本州では冬になると全て死滅してしまいます。そして翌年も、またその翌年も、南の島で生まれた成虫が本州に渡り、世代を交代しながら北上して、冬に全て死滅することを繰り返します。その「渡り」の目的は謎です。

ウスバキトンボはナツアカネやアキアカネに似たトンボですが、アカトンボの仲間ではありません。止まり方はアカトンボの仲間と異なり、物に掴まって、ぶら下がるように止まります。

(7) ハグロトンボ

カワトンボとイトトンボの仲間は翅を立てて止まります。ハグロトンボはカワトンボの仲間。ごく普通のトンボなのですが、みずき野周辺では滅多に見たことがありません。この写真は雌の個体で、腹が黒色です。雄は写真を撮っていませんが、腹は緑がかった黒色なので、雌雄の区別は容易につきます。



ハグロトンボ 8月上旬 本町地区

(8) アジアイトンボ

アジアイトンボはもっとも普通のイトンボの仲間です。小さなイトンボなので目立ちませんが、近づいてみると、その色や姿はトンボの中でも1、2を争うような美しさです。



アジアイトンボ（右はつがい・上が雄）
8月下旬 第2調整池



(9) ホソミオツネトンボ

ホソミオツネトンボもイトンボの仲間。珍しく成虫で越冬するトンボです。越冬後は地色が美しい空色に変わりますが、残念ながら写真を撮る機会がありませんでした。



ホソミオツネトンボ 12月中旬 戸頭地区



トンボ余談



日本人は古代からトンボに親しみをもっていました。古代にはトンボを秋津(あきづ、またはあきつ)と呼んでいました。秋津洲、すなわち「トンボの洲」とは、広辞苑によれば、「大和国。また、本州。また広く、日本国の異称」とあります。

日本書紀は、神武天皇が腋上(現・御所市)のわきがみ 曠間丘ごせし という丘に登って国見をされたときのことを次のように伝えています。

私自身は子どもの頃、最も好きな昆虫はトンボでした。わけても、あの大きく美しいギンヤンマには、憧れのようなものを感じていました。近頃はみずき野周辺でギンヤンマに出会うことはありません。残念なことです。巨大なオニヤンマの勇壮な姿も好きでした。オニヤンマは、城址公園近くで見かけることがあります。道路に沿って、行きつ戻りつしていますが、高速で飛翔する姿はとても写真にはとらえられません。

ギンヤンマやオニヤンマの精悍^{せいかん}さと比べると、トンボはどこかのんびりしたところがあり、癒し系の昆虫です。

とんぼう

蜻蛉や とりつきかねし 草の上

松尾芭蕉

とりわけ親しみを感じるのはアカトンボです。子どもの頃は、秋空いっぱいアカトンボが群れて飛ぶ風景がありました。また、物干し竿にかけた布団や布を貼った板張りの上もアカトンボの好む場所で、ずらりと並んで止まっていたのを思い出します。その頃と比べると、アカトンボも非常に少なくなりました。水田に使われる農薬のせいとも考えられているようですが、これ以上アカトンボを減らさないような工夫が必要かと思えます。

最後に、あの懐かしい童謡を載せておきましょう。



『赤とんぼ』 三木露風 作詞・山田耕筰 作曲

夕焼小焼の赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か

山の畑の桑の実を
小籠に摘んだは まぼろしか

十五でねえやは嫁に行き
お里の便りも 絶えはてた

夕焼小焼の赤とんぼ
とまっているよ 竿の先

